



→ 13
3108
5止



門へ13
3108
5

下
必錢行不借
料高直奉行

御取手年五月
嘉永七年
林
録
端

昭和九年
三月三日
東京

復讐
奇談
稚
枝
鳥
卷之五

東都

曲亭馬琴著編



結
上
藤

第九編

山口城小音羽身と磨る
小瀬川小吳松馬と得る



具松音羽の嚮ふ浪速の浦より妻本林の与三小誘れて周防國
の津中又あると既小半舞おあえりえより夫婦の托庇の恩と
るておのふ足といふはびより内外のりと勢をれば与三もよ
官得つとよろこびたり吳松の店上はありても仇人は背する
四下小眼をめぐりて同國の修行者市街の乞児を多きと
容と伺視るといふもつらむらり似る人もあはとほは又皇都
日よりの清水の視世音と祈念しるるがぬる夏終沢和尚

准
支
馬

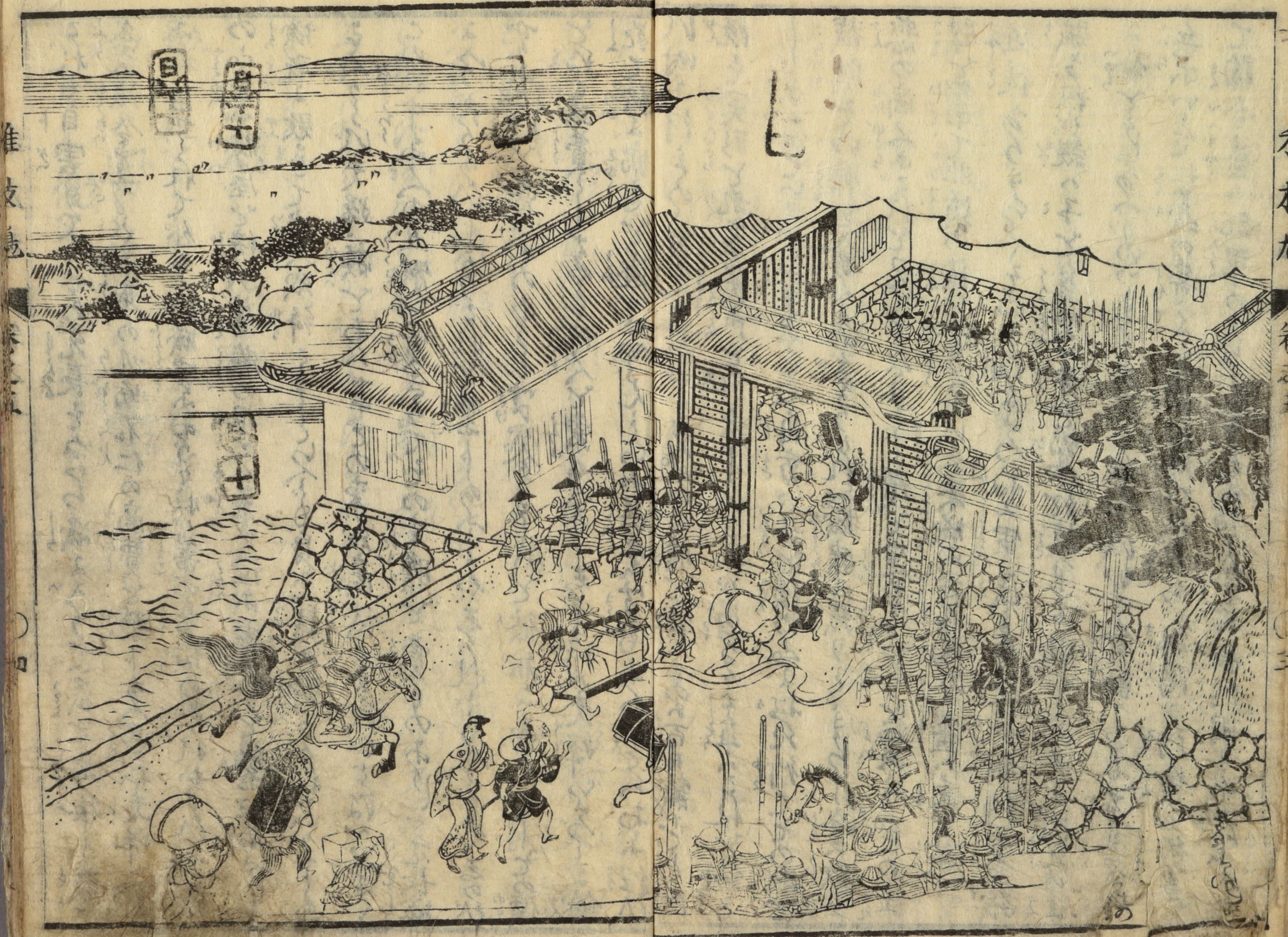
門品續補の奇持より。号松火父と斬て恙ありければ。此の
 この经文と信し。あふ来りても毎夜ふ人定まのち水と陰巻
 の垂門ふと續補とること更み怠るる行く。只速よまが宿志と遂
 んで此の續り。時ふ弘治元年十月のりあり。が城中の士庶
 忽ち紛々奔走して。以の外發動と号し松夫婦も何事ぞとあ
 やし。してその故とさぐぬ。さぐぬこの國の先主大内が義隆の驕奢墮弱
 の大なるを。あられ。老后陶晴賢入道全薑謀殺し。いゆる天文二十年八
 月廿九日。俄頃ふ軍馬と發して。義隆と追ひ。義隆これと挫る。こと
 り。城と出て長門まで落ゆ。いと。同九月二日。全薑が兵透間もな
 く。追ひ来り。い。義隆終ふ大亭寺。み。千て自害し。あ。全薑や
 ごと豊後国主太友宗麟が子ふ。三郎義長といふ人と。追く。大内
 の家督と定め。おのき國政と括めて。その権威主君義長ふ。ま。れり。
 奥よ。藝州の判史光録大夫大枝元長。陶々殘忍と憎み。あ。ひ。今茲弘治
 元年十月。約日。数百の兵。松と。う。當國は。お。あ。あ。その氏族。駒牧川
 高廉の嚴嵩の城より。打て出。海陸二ふ。あ。ま。てこの城と。責ん。と。ま。
 ふ。より。て。城。中の民。駭愕して。家財と。運び。狼狽して。逃。去。ら。んと。す。れ。
 め。を。み。り。る。妻。妾。の。よ。三。この光景と。て。大。お。あ。に。放。兵。ら。づ。く。城。門。と
 鎖。ま。て。逃。れ。去。ら。んと。す。ま。う。敵。の。い。ま。ご。あ。せ。ぬ。先。ふ。逃。れ。あ。ふ。あ。と。
 て。号。松。お。し。へ。く。も。小。城。は。ま。行。装。し。財。宝。と。收。て。城。の。東。門。より。走。り。出。つ。
 吳。松。丈。婦。も。續。て。ま。り。り。あ。あ。お。は。り。人。馬。を。抑。留。せ。し。動。と。れ。の。後。ま。
 ける。松。松。走。り。く。走。り。く。これと。扶。引。と。す。び。逃。れ。あ。ん。と。ま。る。時。脱
 小。と。三。と。う。じ。る。ひ。ぬ。丈。婦。ま。り。く。慌。忙。や。城。を。近。づ。け。り。が。只。見

二個の武者火威の體は五枚胃の緒と縮。楸形の洞小紅の扇の目
 月あつらひ残らひ用て夕陽小輝。白尾毛なる馬のたぐい逞きふ
 白泡をまきせて只一騎走り来つ声さやふりていりく。大おの軍令の
 て。城中の民もぐく迎れ去る。この城おのづから空虚ありて合戦
 後はおふべし。をやく門戸と鎖し。いと下知しれ。ごころゆい。と声
 して忽ち門扉と開らり。あふ放り。号松夫婦。逐し。あふたき
 て。ごいふと呆を。忙。あて。る。ろ。瓜。あ。は。か。て。次。の。日。より。合。戦
 ち。ま。り。大。子。揃。子。矢。石。と。飛。し。矢。叫。び。周。の。声。天。地。お。響。音。て。駭。し。時。お
 寄。子。の。陣。より。透。間。も。あ。く。火。箭。前。と。射。け。ら。り。な。り。六。の。火。兵。糧
 庫。も。燃。ろ。り。城。中。数。万。石。の。糧。米。灰。塵。と。なり。て。う。せ。よ。り。城。兵。お。り。ら
 う。と。て。火。の。防。だ。留。め。と。ど。兵。糧。と。焼。き。と。れ。は。忽。ち。飢。渴。お。及。ん。と
 以。時。お。竹。も。の。後。見。ら。ひ。か。り。ん。の。ま。膽。と。食。ふ。あ。の。百。日。饑。と。同
 視。と。大。形。と。吼。て。百。丈。声。と。吼。り。わ。ら。ひ。い。れ。は。愚。ろ。を。率。い。これ。と。城。と
 一。子。頂。て。い。ま。と。死。も。や。ら。ぬ。自。方。の。兵。と。後。の。山。は。打。た。行。て。その。肚。と
 截。割。その。膽。と。食。ふ。あ。の。ま。り。れ。は。城。中。も。残。り。と。ま。り。つ。貪。欲。を
 悲。心。の。高。人。お。これ。と。て。よ。れ。す。く。價。と。定。め。て。人。命。と。買。と。り。その。生
 腹。と。嚙。南。て。非。道。の。儀。と。食。ふ。ん。と。い。え。来。城。の。老。臣。陶。全。薑。ハ。主。と。殺。せ。し
 逆。徒。あり。ま。つ。その。下。風。よ。ら。お。士。軍。民。も。是。抵。明。約。堂。の。残
 賊。お。れ。は。親。ハ。子。と。信。兄。ハ。身。と。嚙。南。死。生。を。ら。肚。と。斬。き。て。肉。几。の。上
 二。命。と。し。あ。ふ。あ。の。つ。を。と。い。ふ。と。瓜。あ。は。か。く。禽。獸。も。も。芥。ま。り。て
 兵。ホ。い。を。仁。義。の。壽。子。と。防。だ。得。へ。ん。忽。ち。飢。渴。よ。防。禦。の。術
 て。陶。全。薑。ハ。乱。軍。の。う。ら。は。撃。た。大。お。義。兵。の。長。門。國。ま。を。落。し。

准支邊

卷之五

二



維
文
鳥

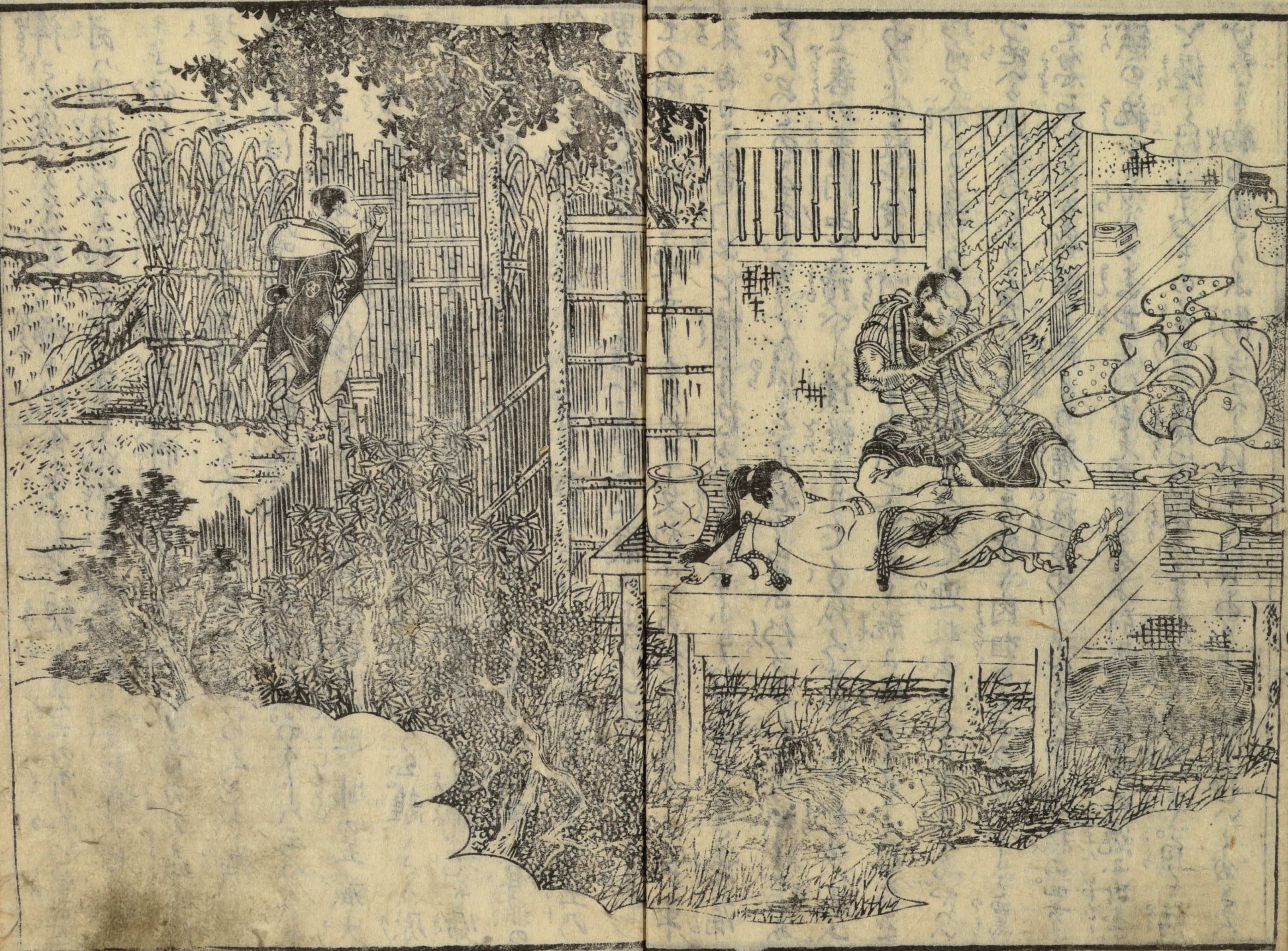
和
本
九
卷
之
五

三

これトもト自害トしてトうトせトぬト。元長トとトらトらト城ト入トりトてト民トとト安撫トしト教トすト。
 奈トのト法令トとトあトりトくト車トのト乱ト坊ト不ト仁トのト高ト賈トとト林ト下トのト人ト馬ト松ト夫婦トのト郷ト。
 小柳ト苗トせトりトてトかトあトりト城ト中ト小トありトりトれトがト籠トのト鳥ト檻トのト獸トけトおトひトふトてト後ト。
 のト山ト夾ト小ト穂ト屋トとト緯ト比ト葛ト藤トのト根トとト食トしてト僅ト小ト露ト命トとト數ト系ト地ト居トはト居ト。
 城ト脱トよト敷トとト出ト入ト乱ト許トさトりトとトいトふトもト。身ト小ト一ト錢トのト貯トまトれトがトいトふトもト。
 とトんトぐトらトびト夫婦ト類トとトあトはトせトてトこのト事ト成ト高ト後トとトらトれトおトはトなトつトてトくト。
 このト城ト中ト小トのト五ト體トとト買トまトりトてトそのト生ト贖トとト賣トりトのトありトしトがト元長ト城ト。
 小トあトりトあトひトらトうト。これトとト禁トトトめトらトうトやト。あトりトれトもト今トりトてト志トのトびト。
 中トふトこれトとト賣トりトものトありトとト言トはトれト。今トらトうトとト彼ト知トよト賣トりトとト。そのト價ト。
 とトゆトてト路ト費トとトとトまトくト仇ト人トとト索トりト入トりト。あトりトらトびト夫婦トいトらトうトとト餓ト。
 死トてト終トるト病ト志トとト遂トぐトさトかトんトとトいトふト。是トもトあトつトてトいトふトおトふトおトひト。
 小ト今トのト身トがト一ト命トとト售トてト路ト費トとトせんト事トおトひトもトうトらトびト。禍ト福ト天トとト係ト。
 まトるト。後ト病ト志トとト遂トぐトてトあトりト死トにトもト妻トとトあトりトてト不ト仁トのト錢トとト貪ト。
 るトべトれトとトらトひトてト更ト小ト後トよトをトうトらトりトれトがトおトひトもト口トとト引トくトやトらトびトこのトまト。
 とト狐トつトりトたト。結トのト足ト松トのト南トのト峯トとト登トりトてト藤トのト根トとト堀ト少ト選トとト立ト。
 うトまトがトおトりト穂ト屋トのト裡トとトあトつトてト竹トのト枝トとト首トのト分トとト出トつトけトうト立ト。
 よトうトとトこれトとトいトふトはト。
 理ト本トのトうトりトれトとト折トるトこのトもトあトりトれト残トりトたトれトあトりトもト。
 号ト松トこれトとトうトとトてト大ト小トおトりトれトとトあトりト妻トとト屠ト人トとトてト出ト去トれトうト。
 彼トらトまトでト遠トくトいトけトじトとトやトくト返ト蒐トくト引トれトがトいトふトとトうトとトあトりト。
 忙トしトくト後トとト省トりト小ト違トうト。たトらト小ト街トとト臨トてトとトせトりトらトりトおトひト。

ゆトうトとトこれトとトいトふトはト。
 理ト本トのトうトりトれトとト折トるトこのトもトあトりトれト残トりトたトれトあトりトもト。
 号ト松トこれトとトうトとトてト大ト小トおトりトれトとトあトりト妻トとト屠ト人トとトてト出ト去トれトうト。
 彼トらトまトでト遠トくトいトけトじトとトやトくト返ト蒐トくト引トれトがトいトふトとトうトとトあトりト。
 忙トしトくト後トとト省トりト小ト違トうト。たトらト小ト街トとト臨トてトとトせトりトらトりトおトひト。

佳
支
急

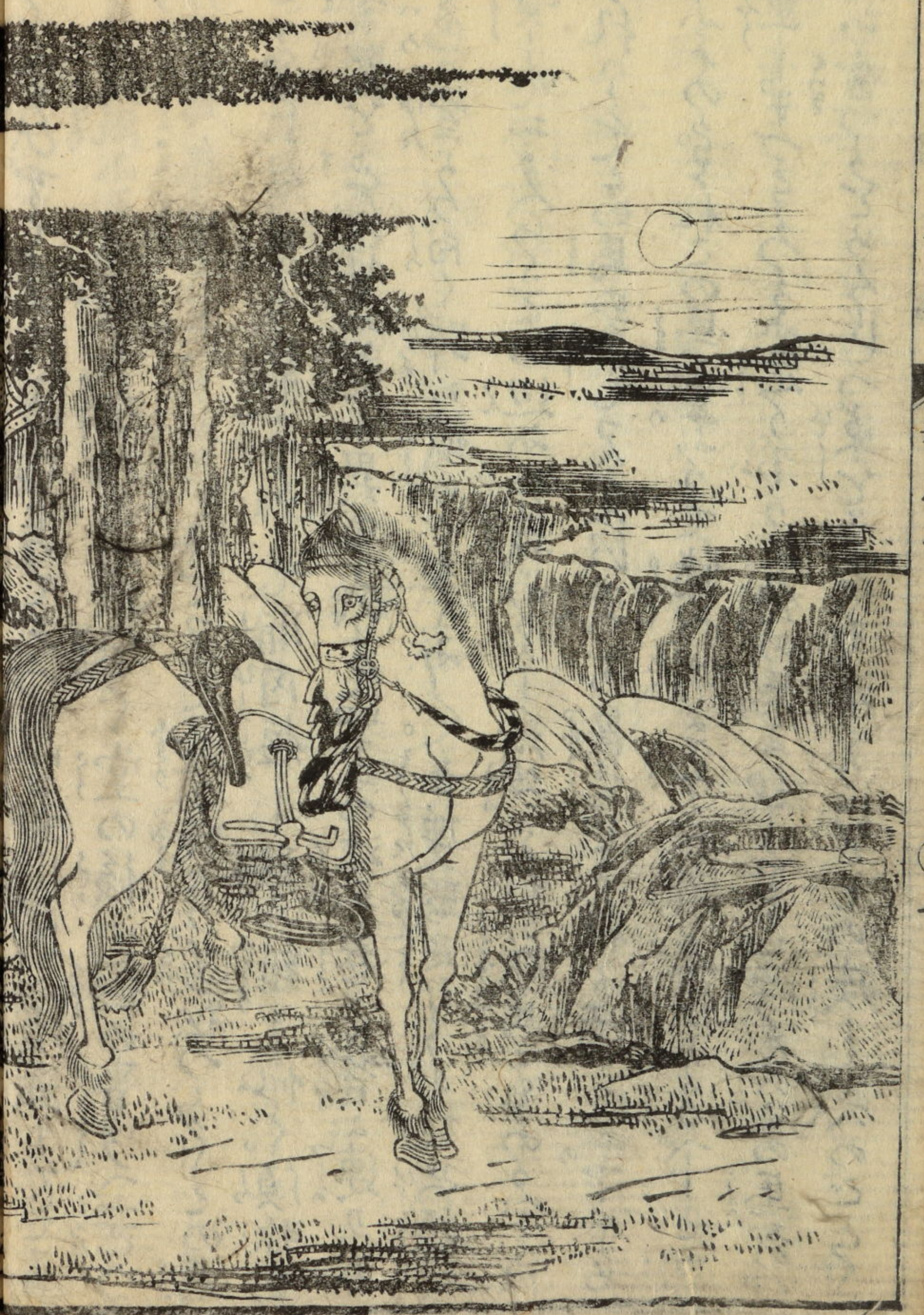
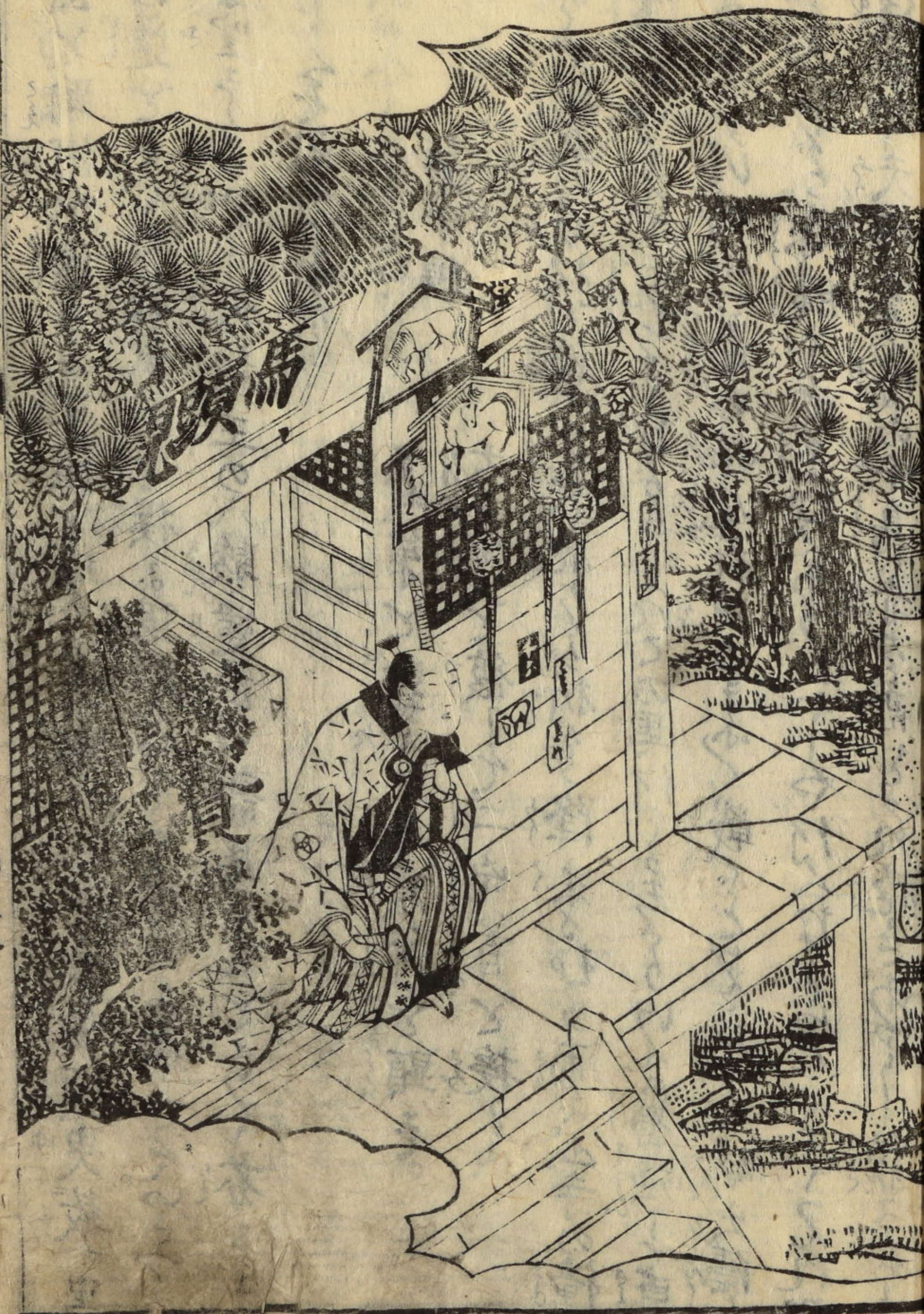


才
水
地

汗あせがららびびふふくく 勃はつたた 偏へん小せう他た念ねんををここららてて 観くわん音おん丈ぢやう士しのの齊せい名なとと唱なへへの
 為ためハハ姐せう板ばんののよよふふををせせらられれららうう 只ただ官くわん番ばん門もん品ひんとと暗あん續じくとと時ときハハそのその経きやうの
 ままにに死しららしし 或ある遭あう王わう難なん苦く 臨りん刑けい欲よく壽じゆ終しゆう 念ねん彼か觀くわん音おん力りき 刀たう穿せん段だん段だん
 壞くわいししつつとところころににつつららてて 刀たう槍しやう尾びののううハハ内ないにに來きてて 忽たちちちとと衝つらら
 色いろハハおおととははハハ一いつ声せい噫いとと叫こゑびび 鮮せん血けつ滾こんとと涌うちちるる 瓜うりののトトハハああららううハハ
 小せう腹ふくままでで 割われれららうう 手てとと傷きずはは小せうささハハ入いるる 肝かん腎じん心しん胆たん肺はいのの五ご藏ざう大だい
 腸ちやう小せう腸ちやう膽たん胃い三さん焦せう膀胱ぼうのの六りく府ふ肉にく姐せうのの上じやうハハああららううハハ玉ぎよく離りととるる 原げん
 上じやうのの秋あきのの花はな脉まきくくらら 沮そ澳あう五ご色しきのの水みづ 万まん丈ぢやう夏げ多たええくく 三さん魂こん地ちハハ帰き
 一いつ。四し大だい風ふう起おこりりてて 六ろく魄はく天てんハハ朝あさにに只ただ足あし眞まこと土つち同どう羅ら府ふのの獄ごく率しつハハ有あ罪ざいの
 餓が鬼きとと屑くせつるる 小せう心しんくくくく 目めももああててらられれぬぬ 分ぶん野やウウハハかかてて 主しゅ乃の
 男おとこハハ一いつ個このの壺つぼハハおおととハハ膽たんとと細こてて 死し骸がいののううハハ一いつひひのの筵しんととらら
 被かせせ。血ちハハ塗ぬりりししとと藁わらををてて 拭ぬぐひひ ぬぬるる びび咄はなひひ占うらんんくく 人ひと膽たんハハ
 買かひひハハ人ひとととままらら 居ゐらら 浩こう無むハハ呉ご松しょうハハおおととんんががるる 小せうおおががつつららくく ぞ
 このこの家いへハハたたづづみみ來きてて ままがが病やまハハととうう 配はいハハ鮮せん血けつををががれれてて 蹴おことと浸ひしし。
 傍かたわらみみハハ大だいなるなる 窸ささああららてて 臭くさききととなるなる ぞぞ 一いつこのこの窸ささハハ死し骸がいとと棄すとと
 ころころハハととつつららううハハおおととんんががるる 安やすららうう 比ひししくく 走はりり入いららてて 走はりりぐぐらら
 女に子こハハ來きららばばややとと問とふふ ありりトト 其その言ことととままてて 彼か錢せんととななげげふふてて 又また
 ららくく。そのその女にここをを只ただ今いまニニ世よ文ぶんのの洞どう仙せんととああらられれああらられれとと 何なにもも
 よよととああららうう 笑わらハハ呉ご松しょうととななてて ちちふふ怒いかりり 不ふ仁じんのの匹ひつ夫ふハハいいふふ 活くわつ業げつハハ
 れれををととてて 人ひととと罵ののりりてて 利りとと射やることことハハああららととああららとと 元もとハハかか方かたよりより 後ご
 れれハハああららうう ちちははれれとと責せららるる 小せう言ごんハハああらら 悲ひ歎たんハハいいふふ 小せう腸ちやうととななららてて
 悔くわいれれももうういいふふ せせききくく むむららうう 死し骸がいハハりりもも又またああららうう 死し骸がい

いらづ地ありやと問はる。徐く姐九のりくふ立より。今る母を
 小ありといひる。上るる楚と除まが。おろした衣服を元のごとく
 被て肉九の上お珍る。肢體をく傷つる。あけまが。こいふと
 きさ果とてつ。ふ必を。号松この光景とて且。び且のや
 連ふその名と喚起。おろしたと驚れ走る。下りて
 と者。又号とて。瞻て坐小杖とゆ。く。且。く。行りて
 しく。組板の上おのせられ。肘を不。をより。官
 眠と。そのちのり。と。て。あり。く。み
 への。お。ひ。を。対面。る。其。士。忍。界。を。疑。ひ。ま
 ぶ。く。く。の。な。れ。の。松。ま。び。わ。く。て。く。く。枝。る。本。ま
 も。大。悲。の。誓。願。り。是。の。親。自。在。の。ゆ。め。ふ。ろ
 り。の。め。や。と。ふ。お。ろ。し。の。言。ふ。心。づ。て。護。身。囊。不。切。る
 普。門。品。と。り。お。押。ひ。た。く。これ。を。見。れ。ば。或。遭。王。難。苦。臨
 刑。欲。壽。終。念。彼。觀。音。力。力。尋。段。段。壞。と。く。く。寸。く。破。れ
 たり。夫婦。ふ。び。これ。と。ん。く。と。い。き。と。飲。喜。甚。躍。と。く
 遙。皇。都。の方。ふ。む。く。ひ。掌。と。合。せ。く。觀。世。音。不。可。思。議。の。妙。智。力
 と。威。謝。せ。り。主。の。男。へ。か。く。觀。音。菩薩。陀。無。量。の。美。驗。あ。り。と。ん。く。忽。ち
 懺。悔。の。ま。ろ。と。護。彼。三。か。く。又。三。か。く。の。錢。と。添。これ。と。夫。婦。お。贈
 ける。我。等。さ。う。ふ。受。ど。と。く。く。孔子。の。盜。泉。と。飲。む。曾。子。の。勝
 母。の。里。へ。入。ら。び。これ。不。仁。の。錢。と。ゆ。く。行。ら。せ。んと。瓜。彈。一。遂。り
 お。は。と。侍。ひ。て。なり。あ。ぬ。か。て。この。の。機。中。置。く。と。風。声。な。れ
 ば。元。長。公。これ。と。傳。へ。あ。ひ。人の。生。瞻。と。啖。ひ。又。足。成。踏。鼻。

のと揃さじやく。ことごとく罪のいひ。号松夫婦とめして。
 彼ホころに來ゆる故と問せらるる。兵衛の復讐一條の縁由
 と詳に演説と。元長公夫婦が久しく艱難のころあつて孝
 義の懈らざるに感下のい。宿志と遂るの後ありはるべしと命せ
 る。路費百金と賜り。おとははと中ふさちあれて厚くこれと扶持
 一のふさち放りまゆの忽ち愁眉とひききて。よく國主の恩恵と
 感佩し。是を遂ふ山口と宿願して次の日因防と安樂の堺な
 る。小瀬川より一附。日も既ふくれ。疎林の中より燈籠の光隱
 ころ。こころひきき。とまはらまゆりてこれとつるふ。前面ふ一個の小堂
 ありて。うらふ馬路。親世音と安置せり。号松これと拜して坐に
 感涙とる。今宵ハまよ通夜して澤枯の佛恩と謝する
 づくおひ。中て堂内ふ坐と占て。まづふ普門ふと讀誦して。居
 らる。既ふその夜も三更のまゆり及く。堂の後小鑊の音。まへ二匹の
 鞍置馬。忽然と走り出。号松とえて連ふ嘶り。号松つづくこの馬
 とつる。骨奉り。竹助太くして脂肉短し。頭ハ雞り似く。須弥の
 髪。膝とどだ背ハ龍ハ異なり。びくして四十二の辻毛巻く。背に連り毛
 の色ハ雪より白く。蹄ハ鐵のごとく。あてて毎隻駿足り。これハ只顧嘆
 賞してあり。へらぐでの辺ふ合戦あり。こゝ狐皮がれば。放馬もあつて。此
 され。さてこの馬の主も見えぬ。天の良馬とこれに借して。あつて。わ
 め。あつた。これこの馬もあつて。緒れ。別ふ。進退便する。へしと。
 量し。まづころころま走り。あつて。件の馬もひら。こ。誇る。この馬も
 くら。害づ。とめ。ぐ。し。つ。東と。こ。て。七。馳。り。ける。その疾し。矢のごとく



山と踰河と渡るふ平坦とゆるより安く。一瞬千歩須臾数千里
の道とせせて旋風面と撲み堪はらざるもの鞍の二困めそつづ
ま望まらるが如し。彼穆王の八駿建武の龍馬もとさく芥るま
どもそつええらるる。

第十編

義弟と導く夫頑神と顕と
大に仇と復して二兇首と授く

かく彼馬八号松と結て只官弛りながら折る降あるむら雨ふ。山寺の撞
遠くゆえて暁ちくわりのまゝ。この馬行とるまらりけん。屬強して更
よまらまひ時ふ一叢の枯尾花風のまゆく戦ごとくそえが燐火隠
このあがり朦朧とそえむふあり。あやも竹人むらんとよくえれば
凌を即夫婦あり。雫の千鳥赤を即とる抱きあかり。顔貌るる

ぬど。何とあくくつほれ。細中りるもと抗く。号松とさく松
翼のくみ指さしけり。号松忽ち哀悼と堪はやがて馬より飛あつて
既不走りよらんとされば猛烈とて消くせらる。この雨雨もや霽く
有明の月へ山際と残さども見えらん。親がふるまひに号松ま
ひく。歎とてつら。樹ハ静るんととされども。風のさめり窓が
と。子へ巻んとほろもれども。親在るに兄弟今神矣とあつて守
たのふし。必しも故あぐ。せもろふ竹園にんとむらとわく。ゆび四
方とるがひれば路ハ一個の傍示杭あり。月光るふまらつんまは青墓の
郷とまらつたら。まてこの地ハ炎流るらる。将何ふ百餘里のたとまぬ。
ここのまらつらと疑ひつ。あや馬ふ水くひて。まらつらその響つとと。翼の
う四五町まらつあやまらまら。錯落る松の下つと縛られらんありら



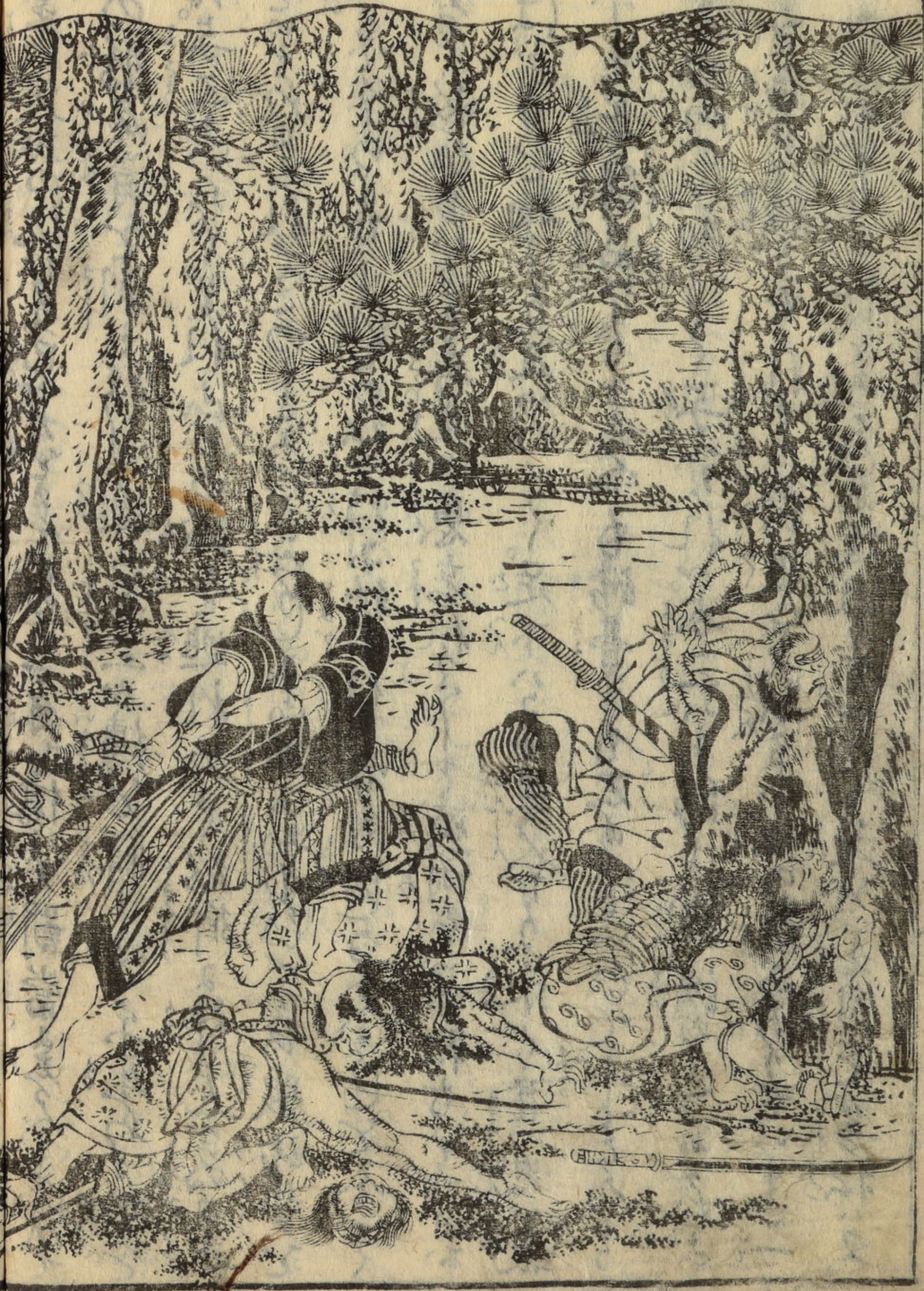
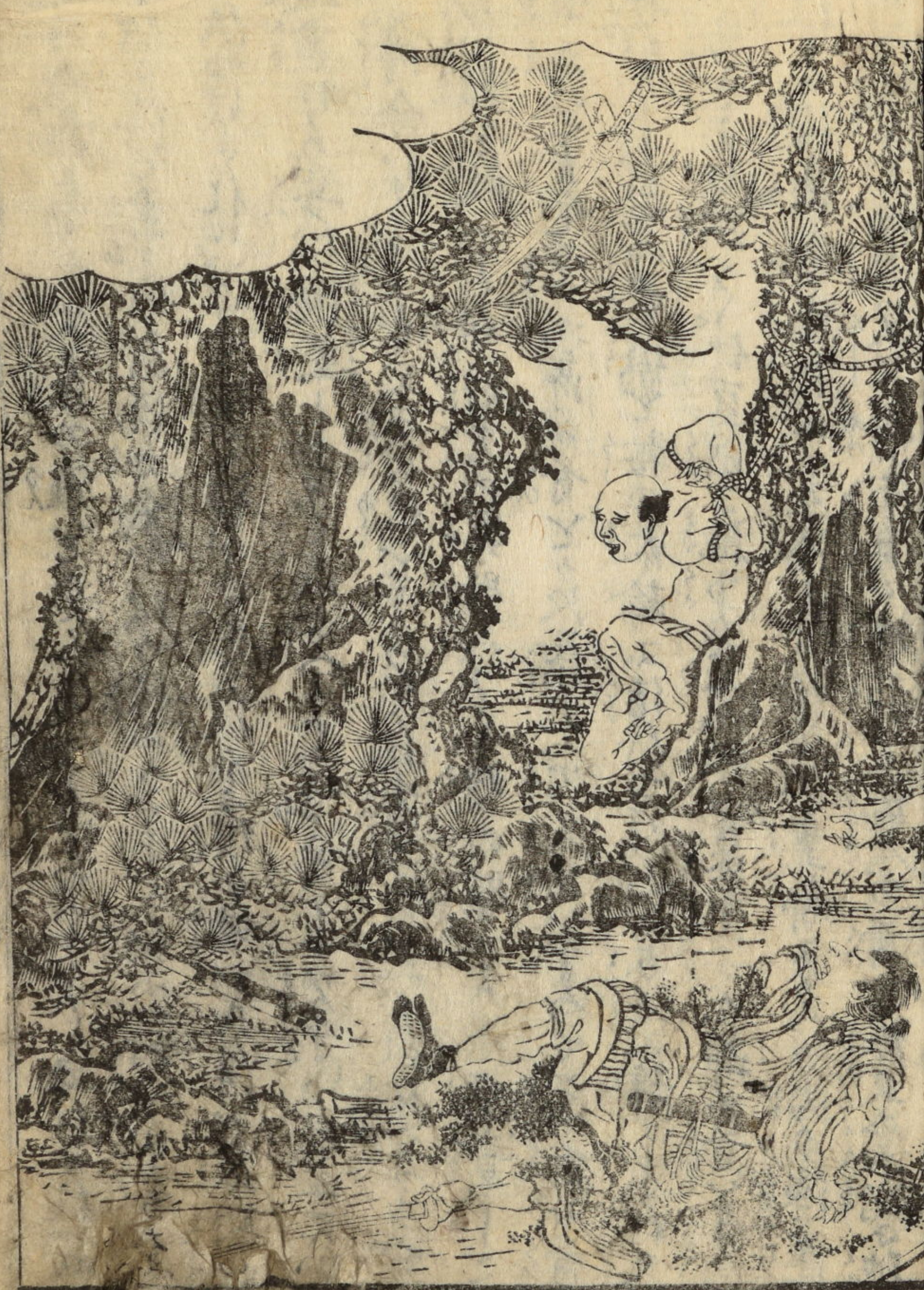
維とく視は更夷の三なり。号松を小影の中も馬と樹間は影を
 悉てその縛と解んとされば。忽ち松のうしろより四人の山賊跳り出
 ち。後て移して来るを。号松左右まうけあがり。だり小三賊と斬倒せ
 二入との勢の小碎易し。刀を引と逃んとする。又四段は切ておけ。その
 疾と白雪の風小翻り。玄鳥の波と翔る。小異々。此頃小耳邊は声
 の鉄砲。其の玉号松を觸と飛。あえて後の松よりち移り。号松は
 とくして瞻あぐれば。松のよ小棚と撞れ。道玄のよ小勇とむまて。始
 筒は玉と落。火蓋と切りんとする。と。号松をやく。小衰。劍
 と飛。その鳥銃と打。おをせ。及玄奮然と怒。とあり。号松は
 銃と擗。捨松が枝より。やうと飛り。二尺八寸展鐵のこ。れ。刀と抜。さ
 し。既。よ。回。ち。り。く。き。も。有。る。こ。の。時。傍。る。松。の。虚。ろ。ろ。殖。栗。字。九。郎。わ。ら
 くれ。お。よ。小。一。挺。の。小。手。銃。と。擗。半。身。は。不。虚。の。内。小。あり。て。ま。ぐ。一。足。と
 虚の外は。踏か。し。透と。覗く。打。さん。い。号。松。を。ち。猛。と。う。き。も。前。よ
 別。款。あり。傍。小。影。道。々。あり。後。二。面。六。碎。月。り。り。も。欲。を。ぞ。う。え。え。う。る
 ところ。小。勿。ち。空。中。小。蛇。の。吼。る。が。こ。い。れ。声。と。く。一。口。の。短。刀。西。北。の。方。より。飛
 来。り。殖。栗。が。う。る。松。の。梢。小。燈。と。閃。き。それ。枝。り。さ。く。と。切。る。あ。れ。雷
 よ。降。さ。る。む。つ。雨。の。栗。や。蒸。き。を。な。残。り。ん。その。枝。落。て。小。銃。の。火。繩。と。ま
 ち。お。う。ら。消。した。り。号。松。こ。の。光。系。と。見。て。何。れ。小。由。も。躊。躇。げ。れ。得。え。ま
 血。小。濺。る。火。又。切。の。刀。と。揚。く。字。九。郎。又。飛。る。松。乃。去。後。より。走。り。来
 つ。や。と。声。け。く。切。ら。ん。と。号。松。高。く。躡。月。と。法。り。助。と。も。こ。と。突。が
 乃。玄。刀。ど。り。ら。う。が。う。怒。り。猶。と。ま。ら。び。が。お。の。き。が。刀。を。脱。を。碎。り。破。り
 半。死。半。生。小。り。う。て。働。れ。得。ど。字。九。郎。小。銃。の。火。繩。の。消。る。の。こ。か

半死半生小りうて働れ得ど字九郎小銃の火繩の消るのこか

惟支鳥
 卷之五
 二〇

らば及去が今より肩より尻にかけて。ひまひく慌るゝら下も少くもあられる
 色と見えに踏むも。挑む戦ふ。考れども号松の天稟ふ側の子練あて。
 一念凝る孝子の太刀風電光のまひもた石火のまゝ乱まらりたぐ久
 五十余合まあひて字九郎や腕つぎりんた刀をちまらまらええけし。バ
 号松ゆるとその刀尖とまゝひ除。右の肱と切くかゝる字九郎今
 かりぐやあひん夫をまらりて。号松が膈まらひつゝんとす
 とも心再び足と切らるゝ。後居ふ撲地と仰倒るゝと号松そのよふ
 踏らるゝとまららそれと責くつら。汝これ千鈞の仇なり。許さるゝと
 が父の天城山の谷庭ふ落されて死ぬひとき。その苦痛今あひま
 べしと罵つ。傍よりありる巻石を奪て字九郎が骨膈と連ち骨砕
 筋あつれ煩くしてぞ死らりける。号松又及去とせりていつく汝を

りが母の仇なり。己が刀とておのこが骨と傷。天罰當まらるべしといひて
 その脛尾骨を刺しほ。遂に子三が縛と解くこふ事ある故を
 問はふ三がいらく。され山口の城を逃れぬ。故郷もあらんがる日夜
 及とぞぞ目くれてこのまらりて。山賊もあひて衣服路費と
 棄るゝのまらりて。この松が枝も折あれて命もりしるまらりて。今や
 及るゝ救ひあらるゝ。再生の恩忘れず。と感謝と。号松ももらるゝ。お
 とはがらりと物ざり。且と。足下はら恩人なり。永く舊恩と報
 及。足薄品なり。とらるゝも路費も忘るゝといひて。かゝるまらり
 金子廿両より物。とらるゝと。与へられ。よこいまひく。感涙をまらるゝ。ねま
 色を受て後らなれらる衣服と索る。松の虚ふありていま。一
 物もうせざり。されば。よろこび。おほほ。とや。て足と。及。号松又



短刀の飛来して火急の難とてくらひのこととてうろくろひられぬ
 とびこれと索ふ。この短刀を松の枝よりうろく。鞘一封の書書を
 携ひつけられぬ。怪しむ。これを讀み姉が家来の
 遺書なり。号松潜然とてうろく。嗚呼。兄の命を
 遺命なり。婿も又夫の仇とて自ら害まひぬ。これ保まらざる宝
 劍急難と救ふ。弁財天の冥助あり。婿の賜なり。賞し。こ
 の呪丸とりて字九郎が首とて死落し。公又切とて道去が首
 とおかし。二ツの首級と鞍の糸輪と結びつけ。遂とて三は辭し。又
 彼馬より跨ぐ。伊豆國又池の父九作が墓。小字九郎が首とて
 寺より檀島弁財天の糸清してゆ。び皇都より上り。津蓮
 寺の坊より福六父子婿千鳥が墳墓。仇人の首と供。又雲の池

て行く。その往來うろく。二日あり。押字九郎道玄ホが青墓。小栖
 故とてぬき。いぬ。夏字九郎多。東寺の四塚よりうろく。中園に逃り
 て。兄潭八を索け。とも終ふ。むろく。途に道玄に
 出れ。あひられ。二人又と踵とて。近に美濃の向よりと潜し。遂とて
 賊とて。四五人の黨類とあり。熊坂長範が後裔なり。仍り稱
 青墓の物見の松と出て夜。旅人となる。けり。天網。遂と編まこ
 と。今号松と殺手と。亦曩。浪速の客舎にて。吳松が衣服。路
 費と集ひ去。偷見の鯖七とて。後よ。美濃國より来りて
 字九郎ホと隨ひ居。これ。小賊。四人のうち。あて
 朝山よりあり。と。え。け。大。ふ。ら。と。び。と。ら。ふ。彼。知。と。池。ゆ。と。て。婿

西對面一復讐の事仔細に説話しての乳丸とくへられれば、
 かねどあて父九作千重の綾を郎が撲死の子とみて深くあはれ、
 只松夫婦が孝養の純篤なりと稱賛し、且うか月の人となりて
 さらけ、さらけ長國寺を死べしと乳丸の短刀を去りし事。
 且く自殺致ともまらこの船山よ來りて勇躬が罪なりと死せし事。
 及夫の仇弾八ホと稱し、一紙納めまは馬川渡りややがて
 彼五人の死骸とありとあらうぬ。げうら茶挽の長し僕本
 工七いまだ死なざりぬ。この二人が向状よりて彈八が隠
 慝勿ち復され夫が悪名やや中續く。かねどあて天目と云ふが
 かねどあて馬川氏模稜の才ありて思慮ふれ人なれば、かねどあて
 かねどあてといふり、やあられん。かねて勇躬の獄中ふ死すと披
 露し。自己の身宅小かくしおられ、死志する人絶くする事なれ
 ばこの一條事明白お及ぶとて勇躬のやびこの世おせめて更中當
 家小住ののこりて、いづれも教所の庄園としおひられん。
 世の人郷高又宮とて、夫が墓に及びて長國寺の活率邦婆
 とつり。それまら馬川氏明孝の恩澤よ及ぶのありとづ
 かねどあての語り、勇躬の獄中より退死ゆて、号松小名
 對面一互ふよりるるり、かて号松ハ又の馬小うら
 かねどあて、因幡國おしむれり。小津川とらぬ時、おび馬頭親
 音ふ系流一。一瞬のうちに百餘里のるを馳て、轍く仇人とうら
 一、偏ふこの馬乃ちうらあて、大士の擁護ふやわらとて、
 少刻像前額づれ、退死せし馬小名んとすり。本の間、

かねどあて、偏ふこの馬乃ちうらあて、大士の擁護ふやわらとて、
 少刻像前額づれ、退死せし馬小名んとすり。本の間、

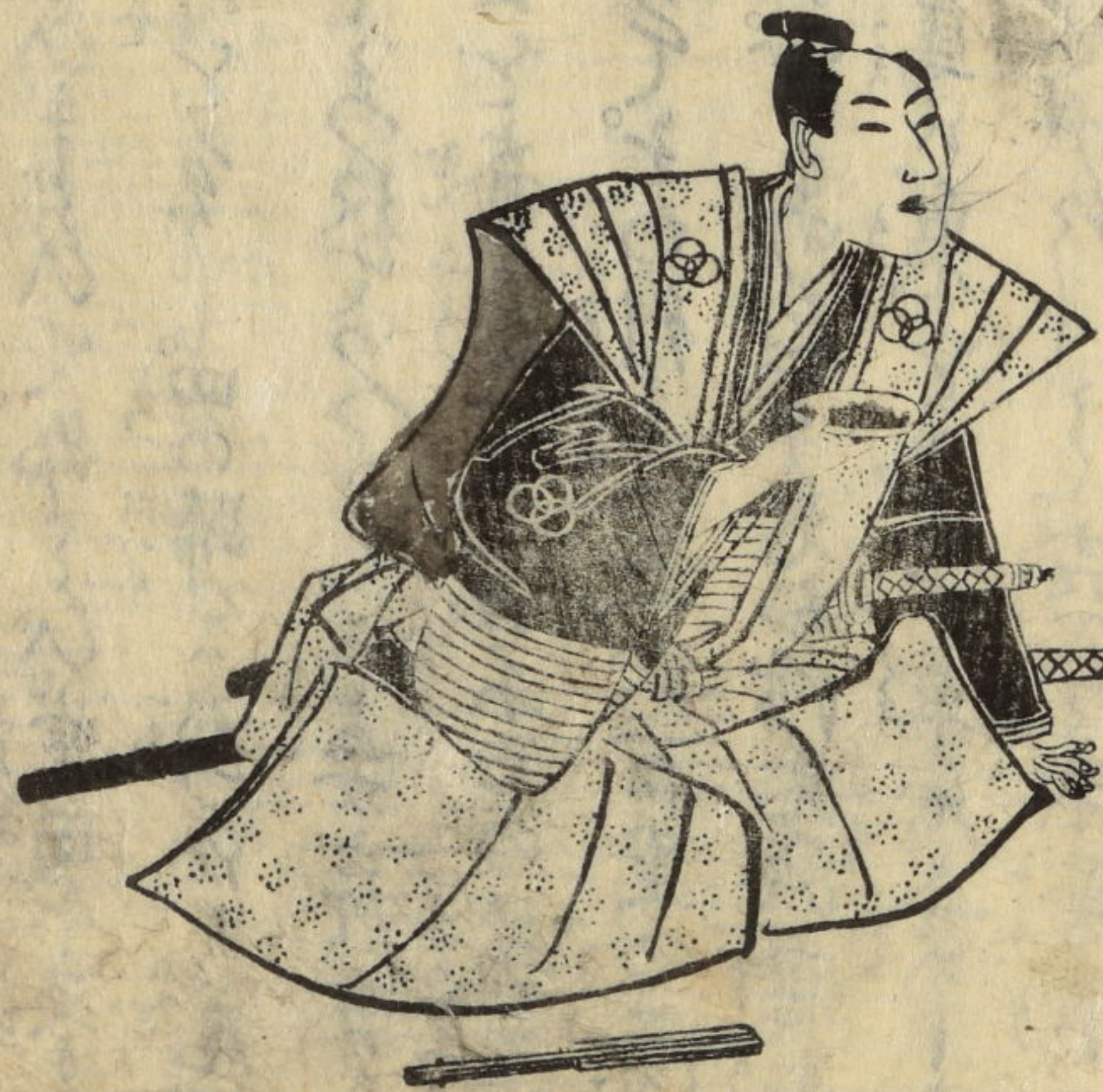
東海有女
賢而艷妖
千里遣嫁
一身無聊
松吟清節
瑟瑟已調
月照心烈
分鏡再絲
勇勝男子
名蓋市朝
功除奸賊
德到雲霄



乘興不覺
來遠興竭
忽驚雪深
男子森遊
虎穴縶難
識虎狼心



孤另懷讐
志不移赤
心端的佛
神知切名
自許翁兼
運陰報從
來有定期



斷髮鷲
操誓不
易履身
心熨更
應難
乘興不覺



勢だおとさる馬也。然しうせうけは。さうあやし。そは彼と家
 と。いふも。終ふる人。いふも。疑ひまじひて。物さび堂。肉ふ交う。と。え
 れ。い。堂の左辺の本馬。今。肉ふ。汗と。さう。四の蹄。よ。出つ。て。尾。づ。よ。蹴
 あげ。の。泥。あり。号。松。駿。然。と。お。う。り。て。う。う。く。鳴。呼。奇。あり。う。ま。こ
 の。本。馬。と。れ。と。交。せ。て。千。里。と。奔。走。せ。り。げ。お。こ。の。勢。云。別。より。
 美。濃。伊。豆。出。雲。よ。う。り。て。その。村。集。五。六。百。里。の。道。う。り。と。
 う。づ。う。三。日。が。間。と。馳。ぬ。る。馬。の。世。も。あ。り。べ。う。も。お。び。え。び。唐。山。の。鞞
 幹。の。朝。の。金。剛。が。画。け。る。馬。の。鬼。と。交。せ。革。瓜。食。し。と。皮。と。
 本。馬。の。人。と。交。せ。て。千。里。と。ゆ。り。し。古。今。未。嘗。有。の。椿。栗。
 玄。造。廣。大。の。利。益。あ。り。う。り。と。信。心。つ。や。ま。り。て。感。涙。袖。ふ。あ。ぬ
 たり。り。耐。は。難。八。旬。あ。り。の。鬼。交。う。う。結。末。と。老。う。う。く。大。出。と。

祈念しけり。忽ち被本馬と見え驚たてつ。く。おや。へ。ま。出
 本馬の。む。く。延。徳。三。年。この。地。の。主。う。楯。縫。造。酒。進。久。世。い。ひ。い
 人。當。國。と。逃。放。せ。れ。日。忽。ち。う。せ。り。し。が。今。六。十。五。年。の。ち。
 ゆ。り。あ。り。う。り。其。の。事。う。り。と。う。号。雲。の。こ。の。言。口。派。び。て。ま。は。く
 感激し。さて。た。この。親。世。音。の。う。が。祖。父。久。世。の。肉。依。佛。あり。て。本
 馬。の。こ。れ。と。助。し。と。三。世。の。奇。遇。あ。り。と。あ。れ。と。悟。り。得。て。う。り。未
 馬。の。冥。驗。と。物。さ。れ。が。老。翁。ま。は。く。嘆。賞。し。共。に。感。涙。よ。む。せ。び。け
 せ。つ。て。号。松。の。次。の。日。山。口。あ。り。う。り。つ。を。う。り。復。能。雲。の。形。勢。と。辨。れ
 ば。お。と。ま。が。う。り。と。び。り。と。し。元。長。公。ま。ま。が。耳。心。あり。て。小。瀬。川。岡。田。の
 御。と。賜。り。う。り。當。家。の。法。の。音。と。命。せ。り。彼。も。是。も。天。女。と。大
 土。の。冥。助。よ。う。れ。と。て。号。松。の。小。瀬。川。の。觀。音。堂。お。修。造。と。う。り。交

弟宅のうらふ身財天と勸請し。実父母養父母千鳥綾太郎
かこらふ松平追福し。君よつふまらうて忠を竭し。人と憐まそ
悲とありつとくをなれば。おとほはやくもあく三男一女を生ぬ。其
次男は餘綾氏を目て養家と起し。思孫まゝ大枝の家知つるを
其ふ百餘歳の長壽とよりち。天下泰平五穀豊登して万民無異
小ゆふなり。誠よこれ孝烈一對の兄弟又一對の夫婦あり。かぐ竹島
ふらめてその美と傳へんや。上藤

復讐奇談稚枝鳩巻之五 大尾

飯台曲亭翁嘗所著之稗史文思奇絶義
理深妙乃擇畫者而圖之擇剖剝所刻之
繡梓既成亦手自校正蓋曲亭翁重姓瀧
澤名解字瑣吉別號著作堂亦稱簞笠隱
居世人呼為馬琴子本房每歲得其所著
以雕刊此編最工致可謂真滑稽之雄也
冀披閱者勿捲腦勿折角勿以爪侵字勿
以唾揭幅勿以作枕勿以來刺隨損隨修
隨開隨掩古人觀書法槩如此因書千篇
後以為記

東都

寶善堂記

画本漢林楚軍談 前編五冊 後編五冊 出来

小説比叟立文 全二冊先どちて 賣出しおきん

遠近草紙 著作堂主人隨筆 全三冊未刻

源家 四天王剽盜異録 曲亭十秘録の 全八冊来寅春出来 小説の筆奇也

繡像

畫者

剖刷

一陽旅厨豊國

小泉新八郎刀

文化二歳次乙丑春正月良辰兑行

繡梓書肆

本所相生町丁目

紙屋利助板

頼豪阿闍梨怪白貳傳

前後十卷 曲亭馬琴作 葛飾北齋画

四天王剽盜異録

前後十卷 曲亭馬琴作 歌川豊國画

うさふ安方忠義傳

前後八卷 山東京傳作 歌川豊國画

繪本浅間ヶ嶽

前後九卷 柳亭種彦作 蘭齋北嵩画

霜夜乃星

全五卷 柳亭種彦作 葛飾北齋画

元川仁勇傳

前後十卷 爲永春 歌川

資本所 江両國吉川町中

